

仁科記念財団 案 内

1999年 4 月

財団法人 仁科記念財団

目 次

まえがき	1
§ 1. 仁科記念財団は次の事業を行っています	3
§ 2. 仁科記念賞について	4
§ 3. 仁科記念奨励金について	4
§ 4. 仁科記念講演会について	5
§ 5. 財団出版物の普及にご協力ください	6
§ 6. 仁科記念財団の活動——1998年度——	8
1997年度「仁科記念財団案内」の訂正	16
財団法人仁科記念財団寄附行為	18
役員および評議員名簿	24
談話室	26
付 録	
仁科記念賞受賞者とその業績	30
仁科記念奨励金贈呈先——小規模国際研究集会	37
海外派遣研究者	45
途上国若手研究者招聘	51

仁科記念財団案内

ま え が き

仁科記念財団は1955年に戦後いちばん早く学術振興財団として、わが国の原子科学の祖、仁科芳雄博士を記念して創立され、そのとき以来毎年仁科記念賞の贈呈と定例仁科記念講演会を欠かさず行い、またその他いくつかの事業を続けております。財団の設立当初の基金は、わが国財界からの寄付金2,165万円と内外学界の個人からの寄付金334万円から成るものでしたが、数年で使いきってでもその活動を有意義なものにする覚悟でした。しかし、朝永振一郎博士（当初は財団常務理事）らをはじめとする学界関係者の努力による活発な活動と、初代理事長渋沢敬三氏その他財界のかたがたのご配慮により、財団の永続が図られ、その後数次の募金によって、今日では6億円余りの基金をもち、その利子で活動できるようになりました。そして最近では、各界からいただく賛助会費ならびに臨時の寄付金にも依拠して活動を続けています。

さて、資金面では、上に述べたような状況ですが、財団の存在の意義が広く認められ続けるためには、国内外の広い層からの支持と協力が必要です。そして実際、今日まで活動を続けることができたのは、古くからの財団関係者のほか、また財団法人の理事会、評議員会に席をもってはおられない多数のかたがたの、温かい支持と協力のおかげであります。

そのような支持と協力にこたえ、さらにその輪を広げることを念願して、われわれは13年前から、この小冊子「仁科記念財団案内」を発行しております。それ以前には、講演会の記録等を載せる出版物“NKZ”に、理事会、評議員会に提出する「事業報告および収支計算書」の内容の一部を付記するにしていたのですが、それだけでは、講演記録に興味をもって購読なさるかたとか、講演会を聴きに來れるかた以外に対しては、財団の広報がいきとどきません。

この小冊子の「案内」という名前は、戦前の財団法人理化学研究所が出していた同様な小冊子にならってつけました。戦前の「理研」は、欧文と和文の研究報告の

出版のほかに、毎年、各研究室の研究題目と所属研究者全員の氏名を記した質素な小冊子を出しており、そこには「寄附行為」という名の、ほかの法人では「定款」と呼んでいるものに相当する文書も掲載されていました。それにつけられていた「理化学研究所案内」という、かざり気のない名称は、当時の「理研」の気風をよく表していたように思います。それにならって名づけたこの小冊子が、すこしでも多くのかたに、仁科記念財団に対して親しみをもってもらい、支持者になっていただくのに役立てば幸いと存じます。

1999年3月

§ 1. 仁科記念財団は次の事業を行っています

1. 仁科記念賞贈呈

広義の原子物理学とその応用を中心とする研究分野における卓越した業績に対して銀メダルおよび副賞を贈呈します。

2. 仁科記念講演会の開催

広く原子物理学とその応用を中心とする学術の進展に関連し、かつ一般の関心事にもつながる諸問題を内容とした定例の記念講演会および同じ趣旨の地方講演会を開催します。

3. 仁科記念文庫の運営

当初は仁科博士の蔵書および寄贈によって追加された多量の図書を根幹としていましたが、現在は、仁科記念室および朝永記念室*にある多数の貴重な資料の整理を主としており、その成果を広く利用しやすくするための作業を行っています。

* 筑波大学にも「朝永記念室」があり、それと連絡しあっています。

4. 仁科記念奨励金の贈呈

- a. 小規模国際シンポジウム開催を助成します。
- b. 在外研究をする若い研究者に1年間の滞在費および旅費を支給します。
- c. 発展途上国研究者の来日研究のために、同様な援助をします。

5. 外国のすぐれた学者の招聘

諸外国の指導的な科学者を招いて講演を依頼し、かつわが国の研究者と交際し、討論に参加していただきます。

6. 広報および調査

講演記録等を載せた“NKZ”および広報誌「財団案内」の出版，ならびに仁科博士，朝永博士をめぐる科学史資料の収集調査を行っています。

§ 2. 仁科記念賞について

「仁科記念賞は，原子物理学およびその応用の分野できわめて優秀な成果をおさめた研究者に贈るものであります。この賞の特色は，功成名遂げた大先輩に贈られるのではなく，むしろこれからの活躍を大いに期待される若い研究者に贈られる点にあります。」（“NKZ”創刊号(1962) 43ページより）

1998年度までの受賞者とその業績および当時の所属を巻末に掲げます。それをご覧の際，申すまでもないことながら，当時の受賞者の年齢を思いうかべてください。

§ 3. 仁科記念奨励金について

この研究奨励金は，小規模国際研究集会の助成(1980年度以降)と，わが国の若い研究者の海外での共同研究への援助（1956年度から），および発展途上国の研究者の来日研究への援助(1992年度以降)にあてられており，小規模国際研究集会の助成は，学会誌の欄を利用して公募します。「小規模」国際研究集会というものの定義は，総経費（参加費を除く）500万円程度までのものとします。そしてその申請に対して仁科記念財団から200万円以内の助成を行います。

研究者の海外での共同研究への援助について述べますと，仁科記念財団が派遣する研究者は，単なる留学生というよりも，派遣された先の国で行われる国際共同研究の重要なスタッフとなっております。そして仁科記念財団から派遣されたということが，先方の国の大学や研究所に助手等の形で就職した場合にくらべて，ずっとよく研究能率向上に役立ったというのが，いままでの海外派遣研究者の多くの人の声であります。海外派遣研究者は公募して選考します。応募されるかたには，財団

から選考にあたって参考にするためにご意見を伺うことのできる数名のかた（いままでの指導者および同僚）を指名していただきます。滞在期間は1年とします（優秀な応募者にすこしでも多く機会を提供するため、そのように改めました）。なお在職者のばあいには所属機関の承認を得ることが必要です。

発展途上国の研究者の来日研究への援助においては、受け入れをわが国の同じ分野のかたに担当していただき、入国ならびに滞在中のお世話をお願いしております。科学研究の国際協力が今後ますます重要性を増すことを考えますと、仁科記念財団の上述の三つの助成の意義をことに若い研究者が深く理解し、それを活用するとともに、自らもその事業の発展に積極的に寄与することが望まれます。

§ 4. 仁科記念講演会について

仁科記念財団は、仁科博士の誕生日にあたる12月6日の前後に、定例の記念講演会を東京で催すほか、地方講演、高校理科教員のための講演会、外国の著名物理学者の来日のおりとか例えば朝永博士のノーベル賞受賞の際とかの特別講演会などを、随時行ってまいりました。

定例の仁科記念講演会は、1998年度ですでに44回を数え、伝統を誇りうるものとなりました。

仁科博士は倦むことを知らない啓蒙家でありました。それは一般社会に基礎研究の意義を理解させる必要を強く感じられたからであります。そのような講演に、門弟たちはしばしば宇宙線用の大きなサイズの計数管を持ってお伴をさせられたものです。

仁科記念財団の二代目理事長であった朝永博士は、師の仁科博士におとらず公開講演に熱心でありました。朝永博士の独特な話しぶりは聴衆を魅了したものです。朝永博士およびそのほかの講演者たちの名講演の記録は、財団の初代理事長渋沢敬三氏の熱心な意見に従って発刊された財団の出版物“NKZ”に掲載され、バックナンバーでそれらを読むことができます。

朝永博士は1978年病におかされ翌年7月に他界されましたが、病床にあっても仁

科記念財団のことを気かけられ、ことに記念講演会については、次のように言われました。

「仁科記念財団は社会に向かって開かれた窓を持たなくてはならない。記念講演会はその大切な窓の役割を果たすべきものだから、すくなくとも定例講演会は努力して続けるべきだ。随時の開催というのはルーズになりやすい。」

晩年、朝永博士は財団が準備するもののほかにも数多くの講演会で話をしておりましたが、仁科記念講演会については、そのような特別な意義を強調しておられたのです。

仁科記念講演会は、いろいろな大学と共同主催という独特な形で行われています。かつては「朝日講堂」のような大講堂を借りて、不特定な世間一般に向かって広報して来聴を待っていたのですが、その方式では、世間が派手になったのに負けないだけの広報をすることがむずかしく、ことに学生諸君には徹底しないうらみがありました。

そこで、次のような方式にきりかえました。仁科記念講演会を学生や若い研究者の層に広く知ってもらうために、いわば「拠点校」の大学を輪番に決めて、すくなくともその学生は来聴しやすいようにする。都内の大学のいくつかに順々をお願いして会場を借り、その教授たちから学生に勧めてもらう。また、他の大学の学生や若い研究者たちにも参加を呼びかけるという方式です。

大学と共同主催で行うこの方式の長所は、その大学の学生諸君が参加しやすいこととほかに、他大学の諸君を勧誘することによって大学間の交流を活発にする効果が得られる点にあります。さらにまた、この伝統を知っているいろいろな学校の同窓生が顔をあわせる機会にもなっています。

§ 5. 財団出版物の普及にご協力ください

公開講演会は、仁科記念財団の重要な事業の一つですが、その講演会に来聴できなかった人のためにも考えるべきであり、講演記録をぜひ出版する必要がある、というのが、初代理事長故渋沢敬三氏の強い願望でした。また、公開講演会について二

代目理事長故朝永振一郎博士は、これは財団が社会に向かって開いている大切な窓だから、手をぬいてはならないという持論でした。われわれは講演会活動を活発にし、行われた講演はできるかぎり記録を出版するように努力しております。そして、出版されたものは、できるだけ多くの人々に読んでもらいたいと願っております。

1. 図書館・図書室に置くことについて

仁科記念財団の講演記録シリーズもNo.38にまで達しました。そして、古いもののなかには、在庫切れで、再版したものもありますが、次に述べる有料頒布および財団関係者、寄付あるいはご協力をしてくださったかたへの贈呈をした残りが、300部以上あります。これを死蔵すべきではないと考えます。大学や研究所そのほかのかたに紹介者となっていただくことにより、できるだけ多くの図書館・図書室等に置くようにしております。

図書館・図書室等に置いて、多くの人の目にふれやすくするこの運動にご協力ください。そしてすでにご協力くださったかたには、この講演記録シリーズに今後加えられるものについて、事情を知っている後継者を（たとえば図書委員会の形で）つくっていただくようお願いします。図書の保管については、専門の司書に世話をやいてもらうことになりますし、今後の寄贈についても、係の人に事情を知っていただく必要があります。記念講演会の共同主催についてと同様に、若い教室員への申しつぎの点でご配慮いただきたいと思います。

2. 個々のナンバーの有料頒布について

講演会の場合と同様、無料がよいという考えもあるかもしれませんが、無料で頒布すればよく普及するというものでもありませんので、有料といたします。そして、事務能力が不十分であることを考慮して、下記のようにしたいと存じます。

- (1) リストに載っているものを各冊一律に500円とする。
- (2) 郵便振替を利用し、その通信欄に、所属・職名等も記入していただく。
- (3) 郵送の送料のかわりに、一口1,000円の連絡費を納めていただく。（これは、その後の記念講演会等についての連絡にも役立ちます）

§ 6 . 仁科記念財団の活動

—1998年度—

1. 仁科記念賞

本年度は下記 3 件 3 氏の研究に対して贈呈しました。

研究題目 梯子型物質における超伝導の発見

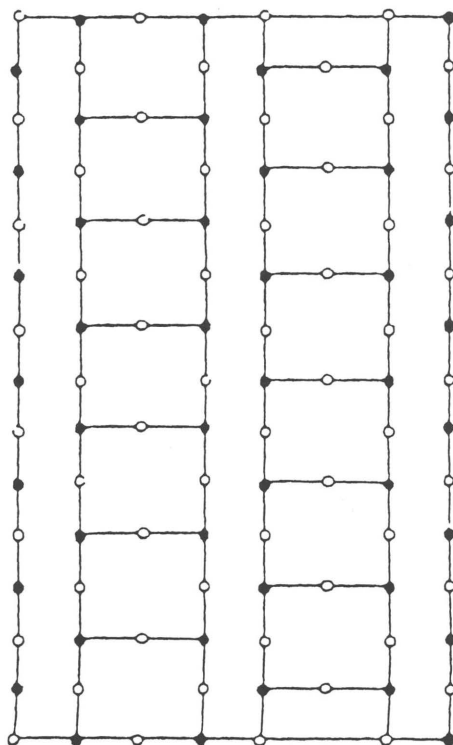
受 賞 者 青山学院大学理工学部 秋光 純 教授

業績の概要

1986年の高温超伝導体の発見以来、銅酸化物の構造、物性について未曾有の集中的研究がなされ、高温超伝導発現の必須の物質条件が確立された。すなわち、銅原子と酸素原子がつくる 2 次元面 (CuO_2 面) にキャリアー (電荷担体) を導入すれば、ほとんど例外無しに、適当なキャリアー濃度で高温超伝導が発現する。この簡単な物質則の導出の過程で、多くの超伝導物質の発見・開発競争があったが、秋光教授は当初よりこのような高温超伝導物質開発研究においても重要な役割を果たしてきた。一方で、この物質則の理論的背景、すなわち高温超伝導の機構理論が盛んに研究され、(まだその詳細については決着が着いていないものの) 基本的には強い電子間のクーロン相互作用 (強い電子相関と呼ばれる) や反強磁性スピン揺動が重要であることはほぼコンセンサスが得られるに至っている。このような高温超伝導機構理論の立場からは、上記のような CuO_2 2 次元面を持たない系での超伝導の実証が待たれており、その過程で、この理論の検証物質として提案されたのがいわゆる梯子型物質 (銅原子の骨格が梯子型、次ページ参照) である。高温超伝導体と同様に、電子相関効果に起因する強い反強磁性相互作用が原因となるが、高温超伝導体とは全く異なる銅-酸素の配置 (トポロジー) で超伝導が起こりうるものが、スイス ETH の T.M.Rice 教授他によって理論的に予言され、世界的な関心を集めていた。

秋光教授は注意深く、系統的な物質合成条件の探索と高圧測定技術を用いた巧み

な電子次元性の制御により、ついに1996年に、梯子型物質の一つである銅酸化物、 $(\text{Sr, Ca})_{14}\text{Cu}_{24}\text{O}_{41}$ において、超伝導 (3GPa 下で臨界温度12K) を発見し、この理論的予測を実証した。この物質は梯子型の2重鎖構造を有し、 CuO_2 面とは異なる構造を持つが、同じく Cu-O 系であるために、超交換相互作用強度（反強磁性の強さ）や母体物質での電子相関強度など、高温超伝導体との共通点も多く、その超伝導状態には現在多大の関心が寄せられている。また、この系が母体絶縁体中では、電子が強相関効果のために格子点に局在して、局在スピンとなるが、このスピン梯子は量子力学的な効果により見かけ上スピン自由度が死んだ状態（スピンギャップを有する状態）となる。秋光教授の発見した超伝導は、同じくスピンギャップ状態を経て超伝導を示す高温超伝導機構とも深く関連すると考えられている。



超伝導が発見された梯子型物質の構造。黒丸：銅原子，白丸：酸素原子

秋光教授は高温超伝導物質研究の初期から、多くの新しい構造を持つ超伝導体を発見したことでよく知られており、たとえば、Bi系と総称される銅酸化物高温超伝導体の最初の基本項物質やT*相と呼ばれる単層CuO₂面の基本構造や炭酸基を含む100K級超伝導体を発見している。今回の梯子型物質での超伝導の発見も、他の多くの競合グループとの先陣争いの末のものであるが、従来の業績にも増して、物性物理学の分野に大きなインパクトを与えている。

研究題目 原子波ホログラフィーの開拓

受賞者 電気通信大学レーザー極限技術研究センター 清水富士夫 教授

業績の概要

量子力学では、ミクロの粒子は波動性と粒子性の二重性を持っている。したがって、多数の素粒子から構成されている原子も波動性を示すはずである。しかし、質量の大きい常温の原子の波長（ド・ブロイ波長）は非常に短いので、その波動性を検証するのは極めて難しい。しかし、原子は内部エネルギー構造を持つ点で素粒子には見られない特徴を持っている。その内部状態を使った操作の一つが、レーザーによる原子の冷却である。冷凍機を使った場合と違って、気体のままでマイクロケルビン（百万分の一度）以下の低温にまで原子を冷却する（原子の熱運動エネルギーを下げる）ことができる。したがって、原子波の波長を光の波長のように長くして、いろいろな基礎研究、応用研究が可能となる。その極限的な応用がボーズ・アインシュタイン凝縮気体の生成で、これは光のレーザーに当たる状態を原子波で作りに出すことにあたる。原子のレーザーによる冷却は科学技術のいろいろな分野に大きなインパクトを与えることを考えると、この領域の開拓者の中から選ばれた三人が昨年度のノーベル物理学賞の受賞者となったのも当然といえることができる。

清水富士夫教授は、世界的に見ても、この領域の主要な開拓者の中でも際立った業績を上げた一人である。先ず第一の業績は、比較的大きな内部エネルギーを持つ上に数十秒と非常に長い寿命を持つ準安定状態の希ガス原子をレーザー冷却する事を最初に思いついて実行したことである。希ガス準安定状態の持つ高い内部エネルギー

ギーを使えば、一個一個の原子を漏らさず検出することができる。検出されるときは一個の粒子となるが、たくさんの粒子を検出した点を重ね合わせると、波動としての干渉や結像の様子が現れる。これは量子力学的観測の基礎概念を直接に目で見ることが可能にしたもので、準安定状態の希ガス原子を使った清水教授の業績である。

このような希ガス原子の特質を利用して二重スリットの干渉実験(図1)(光の場合のヤングの実験)やレンズに相当するマイクロ波電界を使った原子波による結像など応用的にも興味ある一連の実験の成功を経て、清水教授は最も新しい光学的結像法であるホログラフィーの原子波への応用に成功することとなったのである。

光波のホログラフィーはレーザー光の干渉を使って作るのが一般的であるが、光波の振舞はマックスウェルの方程式で正しく記述できるので、計算機を使ったホログラムを作ることも可能である。原子は光と違って透明な媒質を持たないので、原子波の干渉でホログラムを作ることは難しいが、波動方程式を計算機で解いて、ホログラムを作ることは可能である。計算機で作ったホログラムを原子波で再現すれば、思いのままの像が作れるはずである。清水教授は、NEC 基礎研究所の協力を得て計算機ホログラムを作り、レーザー冷却した極低温の準安定状態ネオン原子によ

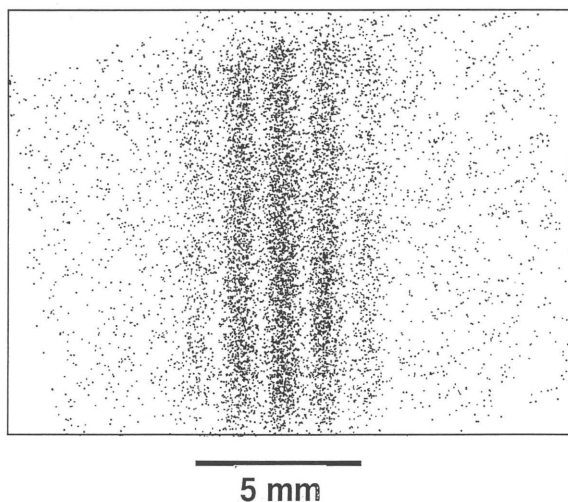


図1 ネオン原子波がスリット幅 $2\mu\text{m}$ 、スリット間隔 $6\mu\text{m}$ を通過したときの干渉パターン。一つ一つの点は検出された原子。

るホログラフィー結像に成功した。希ガス原子準安定状態のレーザー冷却の実験から原子波ホログラフィーの成功に至る長く困難な道程は、清水教授が常に詳細な点に至るまで実験上直接のリーダーシップを発揮したからこそ乗り越えることができたのである。

原子波光学、特に原子波ホログラフィーの成功は、実用的な基礎技術として将来の応用が期待される。光学機械が光波の干渉や結像を行うのと同じ操作を原子波に対して行う装置が開発されれば、基板の上に直接原子を配列させてマイクロ・チップを作り、集積度を飛躍的に高める可能性が期待される。

また、その実験手法は量子力学の基礎原理の実証を可能にし、学術的に大きな意義を持つ。原子の様な複合体も含めて、粒子はボーズ粒子とフェルミ粒子とに分類される。光や多くのアルカリ原子や準安定状態の希ガス原子はボーズ粒子に属し、同じ空間を同時に占める事ができる。光子でそのような状態を実現するのがレーザーで、多くの光子が共通の共振モードを占めてコヒーレント状態を作っている。原子でこのような状態を実現したものがボーズ・アインシュタイン凝縮気体である。このような事が可能となるための学術的な基礎は、2個の粒子が同時に同じ空間を占めることができるか否かという問題に帰結する。その実験的な証明は、2個の原子が近接して見出される確立が大きいことを示す事によって行われる。清水教授は、原子波ホログラフィー技術を発展させて、二原子相関の実験にも成功し、学術的に極めて高い評価を得ることとなった。

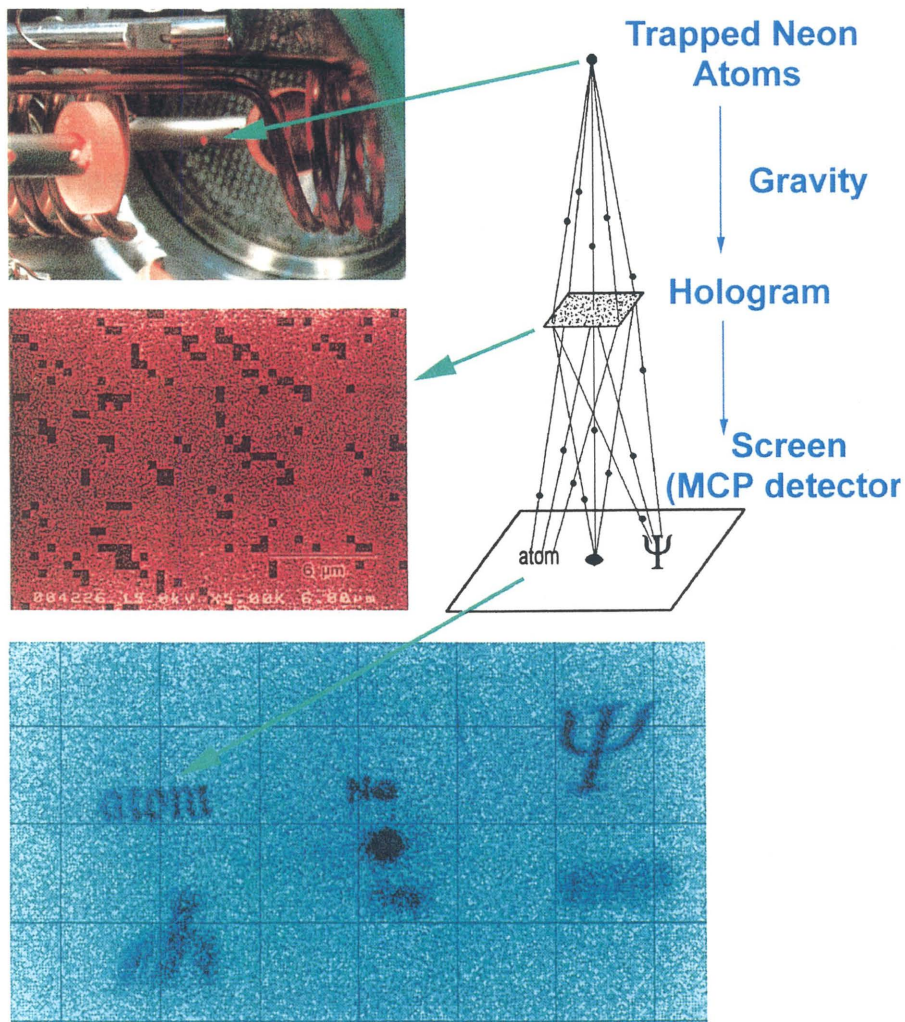


図2 原子波ホログラフィー実験の概念図と原子波による再生像

研究題目 トップクォーク発見に対する貢献

受賞者 筑波大学物理学系名誉教授 近藤 都登 氏

業績の概要

物質の基本的な構成要素と考えられている粒子にはクォーク、レプトン、ゲージ粒子、ヒッグス粒子等がある。このうちクォークと呼ばれているものには原子核の中にある陽子や中性子を構成している u -クォークと d -クォークをはじめとして、 K 中間子や Λ , Σ , Ξ 粒子などの不安定粒子の中にある s -クォーク、また J/Ψ 粒子の構成要素で1974年に発見されてノーベル賞の対象になった c -クォーク、さらには現在 CP 対称性の破れが顕著に見えるとされていて重要な研究対象になっている B 粒子の構成要素である b -クォーク、そして今回の受賞の対象となった t -クォークがある。三世代合計 6 個のクォークでこれ以上はないというふうに思われている。

1977年 b -クォークが発見されて以来 t -クォークの存在は殆ど確実視され、日本のトリスタンをはじめヨーロッパやアメリカでその発見をめざしていくつかの加速器が建設され多大な努力がはらわれて来たが、ついに1994年になってアメリカのフェルミ研究所のテヴァトロンコライダーという衝突型加速器に設けられた CDF 測定器を用いて t -クォークが発見されるに至った。この粒子の最大の特徴はその巨大な質量にある。エネルギー換算で179ギガ電子ボルト（その次に重い b -クォークは5ギガ電子ボルト）という値は初期の予想を超えるものであったが、超対称性理論に基づく推定とは大変良く一致する値である。

CDF コラボレーショングループは巨大な組織で日本、イタリア、アメリカをはじめとする多くの国々から500名以上の研究者が参加し、100億円以上の巨額な経費を用いて建設された測定器を用いて10数年にわたって研究を続けている。日本グループも筑波大、KEK 等から多くの研究者が参加し、日米協力事業の一環として1979年の CDF グループ結成時から最重要メンバーのひとつとして研究に参加している。測定器の分担としては超伝導磁石や電磁カロリメーター等の重要部分を担当している。近藤都登氏は一貫して日本グループのリーダーとして測定器建設からデータの解析に至るまで実際にたずさわって t -クォークの発見という歴史的な業績を上げるのに多大の貢献をしたものである。

2. 仁科記念講演会

本年度は次の記念講演会を開催しました。

P. G. de Gennes 教授, (1991年ノーベル物理学賞受賞者, パリ工業物理化学大学)
を招聘して, 下記の講演会を開催。

題 目 From Rice to Snow
日 時 1998年4月3日(金) 午後3時半より
場 所 東京大学理学部化学教室5階講堂
東大理学部物理学教室と共同主催

題 目 Artificial Muscle
日 時 1998年4月6日(月) 午後3時半より
場 所 名古屋大学ベンチャービジネスホール
名古屋大学工学部と共同主催

Professor Sir H. W. Kroto (1996年ノーベル化学賞受賞者, サセックス大学) を
招聘して, 下記の講演会を開催。

題 目 Science—A Round Peg in a Square World
日 時 1998年10月30日(金) 午後4時より
場 所 東京大学物理学教室1220号室
東大理学部物理学教室と共同主催

日 時 1998年11月5日(木) 午後3時より
場 所 京大大学理学部2号館102号室
京大理学部化学教室および物理学教室と共同主催

第44回定例講演会

日 時 1998年12月12日(土) 午後2時～5時
挨 拶 仁科記念財団理事長 西島 和彦

- 講 演 青色発光デバイスの進展
 ー白熱電球を置き換える LEDー
 日亜化学工業(株) 中村 修二
- 会 場 学習院大学西5号館 B-1

3. 仁科記念奨励金

- (1) 小規模国際シンポジウムに対する助成は休みました。
- (2) 研究者の海外派遣

本年度は次の1名を派遣しました。

高知大学理学部物理学学科助手 津江 保彦

研究目的：ハドロン物質の相転移のダイナミクスと環境下でのハドロン系の性質に関する研究

派 遣 先：Pierre et Marie Curie 大学 (パリ)

Prof. D. Voutherin の研究室

- (3) 発展途上国研究者の来日研究の援助

本年度は次の2名に援助しました。

ベトナム国立自然科学・工学センター レ・ホン・キエム

研究目的：不安定原子核の反応研究

受け入れ担当 理化学研究所 谷畑 勇夫 主任研究員

ベトナム国立自然科学・工学センター ホ・チュン・ズン

研究目的：フォトリックバンドエッジ超放射レーザーに関する研究

受け入れ担当 電気通信大学 氏原紀久雄 教授

1997年度「仁科記念財団案内」の訂正

仁科記念財団の活動, 2. 仁科記念講演会の記述が不完全であったので, 補足する。

茨城大学と仁科記念財団の共同主催の講演会

日 時 1997年7月19日(土) 午後2時半～4時半

挨拶 茨城大学学長 橋本 周久

仁科記念財団理事長 西島 和彦

講演 「未来は与えられているか？」(Is Future Given?)

1977年ノーベル化学賞受賞者 イリヤ・プリゴジン 教授

ブリュッセル自由大学ソルヴェイ物理化学研究所所長

テキサス大学統計力学研究センター所長

会場 水戸市常陽芸文センター芸文ホール

財団法人仁科記念財団寄附行為

第1章 総 則

第1条 この法人は、財団法人仁科記念財団という。

第2条 この法人は、事務所を東京都文京区本駒込2丁目28番45号におく。

第2章 目的および事業

第3条 この法人は、故仁科芳雄博士のわが国および世界の学術文化に対する功績を記念して、原子物理学およびその応用を中心とする科学技術の振興と学術文化の交流を図り、もってわが国の学術および国民生活の向上発展、ひいては世界文化の進歩に寄与することを目的とする。

第4条 この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

1. 原子物理学およびその応用に関する研究において、きわめて優秀な成果を収めた者に対する仁科記念賞の授与
2. 原子物理学およびその応用に関する仁科記念講演会の開催
3. 原子物理学およびその応用に関する図書を蒐集公開する仁科記念文庫の経営
4. 原子物理学およびその応用に関する研究を行う研究機関および個人に対する仁科記念奨励金の授与
5. 原子物理学およびその応用に関する研究を行う学者の招聘および海外派遣
6. 原子物理学およびその応用に関する知識の普及を目的とする出版物の刊行
7. その他前条の目的を達成するために必要な事業

第3章 資産および会計

第5条 この法人の資産は、次のとおりとする。

1. この法人設立の当初に仁科記念財団設立発起人会が寄附した別紙財産目録記載の財産
2. 資産から生ずる果実
3. 事業に伴う収入
4. 寄附金品
5. 賛助会費
6. その他の収入

第6条 この法人の資産を分けて基本財産および運用財産の二種とする。

基本財産は、別紙財産目録のうち基本財産の部に記載する資産および将来基本財産に編入される資産で構成する。

運用財産は、基本財産以外の資産とする。ただし、寄附金品であって寄附者の指定あるものは、その指定に従う。

第7条 この法人の基本財産のうち、現金は、理事会の議決によって確実な有価証券を購入するか、または定期郵便貯金とし、もしくは確実な信託銀行に信託するか、または定期預金として理事長が保管する。

第8条 基本財産は、消費し、または担保に供してはならない。ただし、この法人の事業遂行上やむを得ない事由があるときは、理事会の議決を経、かつ文部大臣の承認を受けて、その一部に限り処分し、または担保に供することができる。

第9条 この法人の事業遂行に要する費用は、資産から生ずる果実および事業に伴う収入等運用財産をもって支弁する。

第10条 この法人の事業計画およびこれに伴う収支予算は、毎会計年度の開始前に理事長が編成し、理事会の議決を経て文部大臣に届け出なければならない。事業計画および収支予算を変更した場合も同様とする。

第11条 この法人の決算は、会計年度終了後2箇月以内に理事長が作成し、財産目録、事業報告書および財産増減事由書とともに監事の意見をつけて理事会の承認を受け文部大臣に報告しなければならない。

この法人の決算に剰余金があるときは、理事会の議決を経て、その一部または全部を基本財産に編入し、あるいは翌年度に繰越すものとする。

第12条 収支予算で定めるものを除くほか、新たに義務の負担をし、または権利の放棄をしようとするときは、理事会の議決を経、かつ、文部大臣の承認を受けなければならない。借入金（その会計年度内の収入をもって償還する一時借入金を除く。）についても同様とする。

第13条 この法人の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第4章 役員、評議員および職員

第14条 この法人には、次の役員をおく。

理事 20名以上25名以内（内理事長1名、常務理事3名以内）

監事 2名以上4名以内

第15条 理事および監事は、評議員会でこれを選任し、理事は、互選で理事長1名、常務理事3名以内を定める。

第16条 理事長は、この法人の事務を総理し、この法人を代表する。

理事長に事故があるとき、または理事長が欠けたときは、理事長があらかじめ指名した常務理事が、その職務を代行する。

常務理事は、理事長を補佐し、理事会の決議に基づいて日常の事務に従事する。

第17条 理事は、理事会を組織し、この法人の業務を議決し執行する。

第18条 監事は、民法第59条に定める職務を行う。

第19条 この法人の役員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

補欠による役員の任期は、前任者の残任期間とする。

役員は、その任期満了後でも、後任者が就任するまでは、なお、その職務を行う。

役員は、この法人の役員たるにふさわしくない行為のあった場合、または、特別の事情のある場合には、その任期中でも評議員会および理事会の議決によってこれを解任することができる。

第20条 役員は、有給とすることができる。

第21条 この法人には、評議員35名以上45名以内をおく。評議員は、理事会でこれ

を選出し、理事長が委嘱する。評議員には、第19条を準用する。この場合には同条中「役員」とあるのは、「評議員」と読み替えるものとする。

第22条 評議員は、評議員会を組織し、この寄附行為に定める事項のほか、理事会の諮問に応じ、理事長に対して助言する。

第23条 この法人に顧問若干名をおくことができる。顧問は、理事会でこれを選出し、理事長が委嘱する。

顧問の任期については第19条を準用する。この場合には、同条中「役員」とあるのは、「顧問」と読み替えるものとする。

第24条 この法人の事務を処理するために書記等の職員をおく。

職員は、理事長が任免する。

職員は、有給とする。

第5章 会 議

第25条 理事会は、毎年2回理事長が招集する。ただし、理事長が必要と認めた場合、または理事現在数の3分の1以上から会議の目的事項を示して請求のあったときは、理事長は、臨時理事会を招集しなければならない。

理事会の議長は、理事長とする。

第26条 理事会は、理事現在数の3分の2以上が出席しなければ議事を開き議決することができない。ただし、当該議事について書面をもって、あらかじめ意思を表示した者は、出席者とみなす。理事会の議事は、この寄附行為に別段の定めがある場合を除くほか、出席理事の過半数をもって決し、可否同数のときは議長が決する。

第27条 次に掲げる事項については、理事会において、あらかじめ評議員会の意見を聞かなければならない。

1. 予算および決算に関する事項
2. 不動産の買入れ、または基本財産の処分に関する事項
3. その他この法人の業務に関する重要事項で理事会において必要と認めた事項

第25条および前条は、評議員会にこれを準用する。この場合には、第25条および前条中「理事会」および「理事」とあるのは、それぞれ「評議員会」および「評議員」と読み替えるものとする。

第28条 すべて会議には、議事録を作成し、議長および出席者代表2名が署名捺印した上で、これを保存しなければならない。

第6章 賛 助 会 員

第29条 この法人に賛助会員をおく。賛助会員は、この法人の趣旨に賛同する団体、法人または個人であつて、別に定める規定により賛助会費を納入する者とする。

第7章 寄附行為の変更ならびに解散

第30条 この寄附行為は、理事現在数および評議員現在数のおのおの3分の2以上の同意を経、かつ、文部大臣の認可を受けなければ、変更することができない。

第31条 この法人を解散するには、理事現在数および評議員現在数のおのおの4分の3以上の同意を経、かつ、文部大臣の許可を受けなければならない。

第32条 この法人の解散に伴う残余財産は、理事全員の合意を経、かつ、文部大臣の許可を受けて、この法人の目的に類似の目的を有する公益事業に寄附するものとする。

第8章 補 則

第33条 この寄附行為の施行についての細則は、理事会の議決をもって別に定める。

付 則

第34条 この法人設立当初の理事および監事は、次のとおりである。

理事（理 事 長）	渋 沢 敬 三	理事（常務理事）	朝 永 振一郎
理事（常務理事）	村 越 司	理事	石 川 一 郎
理事	植 村 甲午郎	理事	亀 山 直 人
理事	酒 井 杏之助	理事	瀬 藤 象 二
理事	原 安三郎	理事	藤 山 愛一郎
理事	我 妻 栄	監事	茅 誠 司
監事	武 見 太 郎	監事	二 見 貴知雄

昭和34年6月1日 一部（事務所所在地）変更認可

昭和41年11月8日 一部（理事および評議員の定数）変更認可

平成2年7月27日 一部（評議員の定数）変更認可

平成3年7月8日 一部（賛助会費制の導入）変更認可

役員および評議員名簿

(1999年 3 月 1 日現在)

理 事 長 西島 和彦

常 務 理 事 鎌田 甲一 鈴木 増雄 中根 良平

理	事	伊藤 昌壽	伊部恭之助	今村 治輔	江崎玲於奈
		小田 稔	鹿島 昭一	金井 務	香西 昭夫
		杉田 力之	関本 忠弘	千速 晃	濱田 達二
		林 主税	原 禮之助	平岩 外四	宮島 龍興
		若井 恒雄	渡里杉一郎		

監 事 池田 長生 岡田 明重

評 議 員	秋元 勇巳	岩佐 凱実	江沢 洋	岡本 耕輔
	金森順次郎	上坪 宏道	木越 邦彦	古在 由秀
	小林 俊一	小林 稔	坂井 光夫	佐田登志夫
	菅原 寛孝	杉本大一郎	高木丈太郎	高見 道生
	竹内 枬	田中 靖郎	玉木 英彦	豊沢 豊
	中原 恒雄	西川 哲治	仁科雄一郎	西村 純
	原 康夫	廣田 榮治	藤井 忠男	伏見 康治
	丸森 寿夫	宮 憲一	宮沢 弘成	山崎 敏光
	山路 敬三	芳田 奎	吉田庄一郎	和田 昭允

談話室

発展途上国からの仁科フェローが仁科記念財団に提出した報告をここに掲載する一例として、今回は、東京大学物性研究所安藤研究室に1997年6月16日から12月15日まで滞在したベトナム国立自然科学・工学センターのグエン ホン ソン氏の報告を載せます。

報 告

Nguyen Hong Son

1 仁科記念財団の計画について知り、フェローシップを得るに至るまで。

1990年代の始めには、われわれベトナム人はまだ世界の物理学会について極めて僅かにしか知っていませんでした。そのころ外国を訪れることは、われわれの多くにとって単なる夢にすぎませんでした。数カ月日本を訪れた経験のある同僚のセミナーで私は彼女の旅行がベトナム政府の金によるのではなく、日本のある組織の援助によることを知りました。私にとってそれは重要な見聞であり、はじめて仁科記念財団およびそのフェローシップについて知ったのでした。私は仁科財団に手紙を書き、驚いたことに久保亮五教授から直接返事を貰いました。そのときは仁科財団は私にフェローシップを与えることはできないけれど、いつでも可能になったときには私の申込を考慮しようと約束してくれました。私は日本を訪れる私の夢がいつの日か現実になるだろうと感じました。その後まもなく私はブラジルの国際固体物理学研究所のポストドクフェローシップを得て、ブラジルに滞在しました。その期間私は申請手続の担当者宮沢弘成教授にしばしば手紙を書いて私の申請がおかれている状態について教わりました。ここで私は、自分にとって極めて重要と考えている思い出を書きましょう。

日本で最善の受け入れ研究者を見いだすことについてです。そのころ私は（発表された論文だけによって）R. Kubo および T. Ando の二つの名前を知っていました。仁科財団に送った最初の手紙の中で、私はそれら二人のうちの一人の指導で研

究したいと書きました。R. Kubo 教授は返事の中で自分はすでに退職しておりホストにはなり得ないけれども T. Ando 教授はもし可能だったら最良の選択であろうと書いています。そして昨年夏 H. Miyazawa 教授から仁科財団が私の申請を考慮することになったと知らされたとき、私は T. Ando 教授にホストになって下さいと手紙を書きました。幸運にも、彼は私が彼の研究室において研究をすることを受け入れてくれました。そしてまもなく仁科フェローに認められた旨を彼から知らされたとき、私は本当にたいへん喜びました。

2 日本における研究活動

物性研究所において安藤恒也教授の指導で私は 2 D グラファイトの強磁場のもとにおける量子輸送量の計算をしました。私はなぜこの問題を選んだか、それがなぜ重要か、計算が終わったとき何がわかると期待したかについて、ここで繰り返して述べるつもりはありません。それらはすべて、コピーを添えた原稿の中で述べてあります。ここで私が言いたいのは、安藤研究室において私は水準の高い物理学の学派で教えられたということです。私は、計算なしで物理がどうすればわかるか、計算を観察結果の記述だけでなく物理を記述するためにいかに用いるかを学びました。それは私にとって大きな収穫であり、それによってこれからの私の研究の仕方を著しく変えるでしょう。

物性研究所にいた期間に私はまた二つのセミナーで話をしました。一つは“量子化磁場における超格子半導体のホッピング伝導”に関してと日本で行った研究について、でした。

私はまた

International Workshop on Nano-Physics and Electronics,

Tokyo, 18-20 Sept. 1997

The 12 International Conference on the Electronic Properties of Two-Dimensional Systems (EP2DS-12) ,

Tokyo, 22-26 Sept. 1997

日本物理学会年会, 10月4日—8日, 1997年

に参加しました。

3 日本の印象、謝辞

日本滞在の6ヶ月間に私は東京および首都以外の著名な場所を訪れる多数の機会をもちました。最も驚嘆したのは伝説の街京都の“金閣寺”です。私はまた大仏のある奈良、京都の鉄道駅、神戸の港、代々木の明治神宮、レインボーブリッジ、浅草も見ました。私はまたいろいろなパーティー、仁科財団の豪華な懇親会や東京大学の国際宿舎の忘年会にも参加する機会をもちました。そこでは研究所の仲間とビアパーティーを楽しみました。私が会った日本の人々はみな親しみやすく、もてなしのよい人たちでした。それらすべてから、日本という国は現代化とハイテクの生活が伝統的な日本的な風習と完全に一体となっている国だという印象を受けました。日本は古来の文化、伝統の土の中深く根を張りつつ、空高く確実に成長する力強い樹木にたとえられます。

終りに臨み、私は仁科財団、久保亮五教授、西島和彦教授、鎌田甲一教授、宮沢弘成教授に対し、たいへん楽しかった滞日フェローシップのお礼を申し述べます。ことに安藤恒也教授には、私が彼から学んだすべての研究経験について感謝します。また Mrs. S. Maruyama ならびに安藤研究室の同僚たちに対し、私の物性研究所における滞在をきわめて快適ならしめた親切なご助力を感謝いたします。

付 録

仁科記念賞受賞者とその業績

年 度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
1955	大阪大学理学部 緒方 惟一氏	大型質量分析器の完成
	大阪市立大学 西島 和彦氏 理学部	素粒子相互変換
1956	大阪大学理学部 芳田 奎氏	反強磁性体における磁気異方性エネルギー
	東京大学農学部 三井 進午氏	同位元素による植物の栄養ならびに土壤肥科学的研究
	農業技術研究所 西垣 晋氏	
	〃 江川 友治氏	
1957	東京大学理学部 久保 亮五氏	非可逆過程の統計力学
1958	大阪大学理学部 杉本 健三氏	原子核の励起状態の磁気能率, および電気四極子能率の測定
	東京教育大学 沢田 克郎氏 理学部	電子ガスの相関エネルギーに関する研究
1959	ソニー(株) 江崎玲於奈氏	エサキダイオードの発明, およびその機能の理論的解明
	理化学研究所 中根 良平氏	化学交換反応による同位元素濃縮
1960	大阪府立大学 吉森 昭夫氏 理学部	磁性結晶におけるスピンのらせん状配列の理論
1961	東京大学 丹生 潔氏 原子核研究所	中間子多重発生の火の玉模型
	名古屋大学 福井 崇時氏 理学部	デイスチャージチェンバーの研究と開発
	大阪市立大学 宮本 重徳氏 理学部	
	京都大学理学部 松原 武生氏	量子統計力学の方法
1962	名古屋大学 高山 一男氏 プラズマ研究所	低密度プラズマの研究——特に共鳴探針法の発明
	工業技術院 佐々木 亘氏 電気試験所	ゲルマニウムの熱い電子の異方性の研究
1963	京都大学理学部 林 忠四郎氏	天体核現象の研究

年 度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
1964	東京大学理学部 岩田 義一氏	静電磁場における電子, およびイオンの運動に関する研究
	東京教育大学 瀬谷 正男氏 光学研究所	真空分光計に関する研究
1965	京都大学教養部 三谷 健次氏 名古屋大学 田中 茂利氏 プラズマ研究所	弱電離プラズマのサイクロトロン周波数における負吸収の研究
	大阪市立大学 三宅 三郎氏 理学部	宇宙線ミュー中間子およびニュートリノの研究
1966	東京大学 小田 稔氏 宇宙航空研究所	SCO-X-1 の位置決定
	東京大学 豊沢 豊氏 物性研究所	固体光物性の動力学的理論
1967	広島大学理学部 小川 修三氏 東京大学 山口 嘉夫氏 原子核研究所	基本粒子の対称性に関する研究
	東京大学 西村 純氏 宇宙航空研究所	超高エネルギー相互作用における横向き運動量の研究
1968	九州大学理学部 森 肇氏 工業技術院 近藤 淳氏 電気試験所	非平衡状態の統計力学 希薄合金の抵抗極小の解明
1969	大阪大学教養部 松田 久氏 名古屋大学 池地 弘行氏 プラズマ研究所 京都大学理学部 西川 恭治氏	原子質量精密測定用大分散質量分析装置の開発 イオン波エコーの研究
1970	学習院大学 木越 邦彦氏 理学部 東京大学理学部 西川 哲治氏	炭素-14 による年代測定に関する研究 線型加速器に関する基礎研究
1971	東京大学 菅原 寛孝氏 原子核研究所 ミュンヘン工科 森永 晴彦氏 大学	基本粒子の対称性の応用 インピーダンススペクトロスコピーの創出と原子核構造の研究

年 度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
1972	テンプル大学 川崎 恭治氏 物理学科	臨界現象の動力学的理論
	東北大学理学部 真木 和美氏	超伝導体の理論的研究
1973	京都大学 中西 襄氏 数理解析研究所	場の量子論における散乱振幅の諸性質の分析
	京都大学基礎物 佐藤 文隆氏 理学研究所	重力場方程式の新しい厳密解の発見とその宇 宙物理学への応用
	広島大学理論物 富松 彰氏 理学研究所	
1974	大阪大学教養部 大塚 颯三氏	半導体電子輸送現象のサイクロトロン共鳴によ る研究
	ニューヨーク市 崎田 文二氏 立大学	素粒子の超多重項理論および二重性理論の研究
1975	東京大学理学部 山崎 敏光氏	核磁気能率における中間子効果の発見
	東京大学 花村 榮一氏 物性研究所	多励起子系の理論的研究
1976	九州大学理学部 磯矢 彰氏	静電高圧加速器の研究とその新機軸の開発
	ロチェスター大 大久保 進氏 学理学部	強い相互作用による素粒子反応に対する選択規 則の発見
	名古屋大学 飯塚重五郎氏 理学部	
1977	東京大学 塩谷 繁雄氏 物性研究所	ピコ秒分光法による半導体の高密度励起効果の 研究
	京都大学基礎物 牧 二郎氏 理学研究所	素粒子の四元模型
	筑波大学 原 康夫氏 物理学系	
1978	分子科学研究所 廣田 榮治氏	高分解能高感度分光法によるフリーラディカル の研究
	東京大学理学部 有馬 朗人氏 東京大学 丸森 寿夫氏 原子核研究所	原子核の集団運動現象の解明

年度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
1979	東京大学 守谷 亨氏 物性研究所	遍歴電子強磁性の理論
	高エネルギー物 小林 誠氏 理学研究所	基本粒子の模型に関する研究
	東京大学 益川 敏英氏 原子核研究所	
1980	大阪大学理学部 伊達 宗行氏	超強磁場の発生
	東北大学原子核 鳥塚 賀治氏 理学研究施設	原子核の巨大共鳴の研究
	京都大学理学部 九後汰一郎氏 プリンストン高 小嶋 泉氏 級研究所	非可換ゲージ場の共変的量子化の理論
1981	東京大学 杉本大一郎氏 教養学部	近接連星系の星の進化
	高エネルギー物 吉村 太彦氏 理学研究所	宇宙のバリオン数の起源
1982	筑波大学 安藤 恒也氏 物理工学系	MOS 反転層における二次元電子系の理論的研究
	(株)日立製作所 外村 彰氏 中央研究所	電子線ホログラフィー法の開発とその応用
1983	フェルミ国立加 山内 泰二氏 速器研究所	ウプシロン粒子の発見に対する貢献
	東京大学理学部 増田 彰正氏	希土類元素の微量精密測定と宇宙・地球科学への応用
1984	東京大学理学部 江口 徹氏 コーネル大学 川合 光氏	格子ゲージ理論
	東北大学理学部 石川 義和氏	中性子散乱による金属強磁性の研究
	学習院大学 川路 紳治氏 理学部	二次元電子系における負磁気抵抗および量子ホール効果の実験的研究
1985	マサチューセッ 田中 豊一氏 ツ工科大学	ゲルの相転移現象の研究
	新技術開発事業 飯島 澄男氏 団	少数原子集団の動的観察
	宇宙科学研究所 田中 靖郎氏	てんま衛星による中性子星の研究

年度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
1986	東京大学理学部 鈴木 増雄氏	相転移秩序形成及び量子多体系の統計物理学
	広島大学理論物 藤川 和男氏 理学研究所	場の量子論における異常項の研究
	広島大学核融合 佐藤 哲也氏 理論研究センター	散逸性磁気流体プラズマの非線形ダイナミクス
1987	東京工業大学 高柳 邦夫氏	シリコンの表面構造の研究
	東京大学 森本 雅樹氏 東京天文台	ミリ波天文学の開拓
	〃 海部 宣男氏	
	東海大学理学部 小柴 昌俊氏	超新星爆発に伴うニュートリノの検出
	東京大学理学部 戸塚 洋二氏	
	素粒子物理国際 センター	
1988	東京大学 須田 英博氏 宇宙線研究所	
	名古屋大学 松本 敏雄氏 理学部	宇宙背景輻射のサブミリ波スペクトルの観測
	大阪大学理学部 吉川 圭二氏	ひもの場の理論
	東京大学 齋藤 軍治氏 物性研究所	有機超伝導体の新しい分子設計と合成
1989	理化学研究所 谷畑 勇夫氏	不安定原子核ビームによる原子核の研究
	東京大学理学部 野本 憲一氏	超新星の理論的研究
1990	東京大学理学部 佐藤 勝彦氏	素粒子論的宇宙論
	東京大学理学部 十倉 好紀氏	電子型銅酸化物超伝導体の発見
	高エネルギー物 横谷 馨氏 理学研究所	リニアコライダーにおけるビーム相互作用の研究
1991	高エネルギー物 北村 英男氏 理学研究所	挿入型放射光源の開発研究
	分子科学研究所 齋藤 修二氏	星間分子の分光学的研究
	東京大学理学部 和達 三樹氏	ソリトン物理学とその応用

年度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
1992	NTT基礎研究所 山本 喜久氏	光子数スクイーズ状態の形成および自然放射の制御
	筑波大学 大貫 惇睦氏 物質工学系	遍歴する重い電子系のフェルミ面に関する研究
	新潟大学教養部 長谷川 彰氏	
	東北大学理学部 柳田 勉氏	ニュートリノ質量におけるシーソー機構
1993	核融合科学研究所 伊藤 公孝氏	高温プラズマにおける異常輸送とL-H遷移の理論
	九州大学 伊藤 早苗氏 応用力学研究所	
	理化学研究所 勝又 紘一氏	新しい型の磁気相転移の研究
1994	学習院大学 川畑 有郷氏 理学部	アンダーソン局在およびメソスコピック系における量子輸送現象の理論
	東京大学 田辺 徹美氏 原子核研究所	クーラーリングを用いた電子・分子イオン衝突の精密研究
	筑波大学 岩崎 洋一氏 物理学系	格子量子色力学の大規模数値シミュレーションによる研究
	筑波大学 宇川 彰氏 物理学系	
	高エネルギー物 大川 正典氏 理学研究所	
	京都大学基礎物 福来 正孝氏 理学研究所	
1995	東北大学大学院 佐藤 武郎氏 理学研究科	超低温における量子的相分離現象の実験的研究
	大阪大学大学院 川上 則雄氏 工学研究科	共形場理論に基づく1次元電子系の研究
	筑波大学 梁 成吉氏 物理学系	

年 度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
1996	日亜化学工業(株) 中村 修二氏 開発部	短波長半導体レーザーの研究
	東北大学工学部 板谷 謹悟氏	固液界面でのアトムプロセスの解明に関する研究
	国立天文台 中井 直正氏 電波天文系	銀河中心巨大ブラックホールの発見
	国立天文台 井上 允氏 電波天文系	
	国立天文台 三好 真氏 地球回転研究系	
1997	東京大学 木舟 正氏 宇宙線研究所	超高エネルギーガンマー線天体の研究
	東京工業大学 谷森 達氏 理学系研究科	
	名古屋大学理学部 三田 一郎氏	B中間子系での CP 対称性の破れの理論
	東京大学物性研究所 安岡 弘志氏	高温超伝導体におけるスピギャップの発見
1998	青山学院大学 秋光 純氏 理工学部	梯子型物質における超伝導の発見
	電気通信大学 清水富士夫氏 レーザー極限 技術研究センター	原子波ホログラフィーの開拓
	筑波大学物理学 近藤 都登氏 系名誉教授	トップクォーク発見に対する貢献

(受賞者の所属は受賞時のもの)

仁科記念奨励金贈呈先

—小規模国際研究集会—

年度	贈 呈 先 代 表 者		対 象	参 加 者
1980	名古屋大学 理学部	早川 幸男氏	Symposium on Space Astrophysics	国内 51 名, 国外 10 名
1981	東京大学 原子核研究所	寺沢 英純氏	1981 INS Symposium on Quark and Lepton Physics, Tokyo	国内 199 名, 国外 22 名
	〃	藤川 和男氏		
	東京大学理学部	有馬 朗人氏	Symposium on Nuclear Collectivity	国内 19 名, 国外 6 名
1982	大阪大学理学部	細谷 暁夫氏	Symposium on Gauge Theory and Gravitation	国内 152 名, 国外 27 名
	大阪大学 基礎工学部	長谷田泰一郎氏	International Meeting on Transition to New Type of Ordered Phase	国内 80 名, 国外 37 名
1983	大阪大学核物理 研究センター	小方 寛氏	1983 RCNP International Symposium on Light Ion Reaction Mechanism	国内 140 名, 国外 44 名
	東京大学 物性研究所	中嶋 貞雄氏	International Symposium on Foundation of Quantum Mechanics in the Light of New Technology	国内 120 名, 国外 46 名
	東京大学 宇宙線研究所	三宅 三郎氏	Cosmic Rays and Particle Physics	国内 95 名, 国外 30 名
1984	高エネルギー物 理学研究所	西川 哲治氏	Future Perspective on High Energy Physics, International Committee for Future Accelerators	国内 120 名, 国外 80 名

年度	贈 呈 先 代 表 者	対 象	参 加 者
1984	理化学研究所 野崎 正氏	5th International Symposium on Radiopharmaceutical Chemistry	国内 92 名, 国外 105 名
	東京大学 西村 奎吾氏 原子核研究所	1984 INS-RIKEN International Symposium on Heavy Ion Physics	国内 105 名, 国外 42 名 (東京) 国内 102 名, 国外 71 名
	京都大学基礎物 牧 二郎氏 理学研究所	The 7th Kyoto Summer Institute Dynamical Problems in Systems	国内 87 名, 国外 22 名
	関西学院大学 山田 晴河氏 理学部	International Symposium on Spectroscopic Studies of Adsorbates on Solid Surfaces	国内 66 名, 国外 50 名
1985	東北大学理学部 糟谷 忠雄氏	The 5th International Conference on Crystalline Field and Anomalous Mixing Effects in f-Electron Systems	国内 118 名, 国外 48 名
	京都大学基礎物 佐藤 文隆氏 理学研究所	The 8th Kyoto Summer Institute, Quantum Gravity and Cosmology	国内 100 名, 国外 20 名
	群馬大学工学部 田沼 静一氏	International Symposium on Intercalation Compounds	国内 71 名, 国外 44 名
	大阪大学 川西 政治氏 産業科学研究所	The 8th International Symposium on Exoelectron Emission and Applications	国内 106 名, 国外 23 名

年度	贈 呈 先 代 表 者	対 象	参 加 者
1985	大阪大学核物理 近藤 道也氏 研究センター	6th International Symposium on Polarization Phenomena in Nuclear Physics	国内 171 名, 国外 134 名
1986	東京大学理学部 小柴 昌俊氏	7th Workshop on Grand Unification, ICOBAN 86	国内 105 名, 国外 50 名
	東北大学 武藤 芳雄氏 金属材料研究所	Joint Japanese-Sino Seminar on Superconducting Materials	国内 58 名, 国外 10 名
	理化学研究所 栗屋 容子氏	The International Seminar on Dynamic Processes of Highly Charged Ions	国内 38 名, 国外 20 名
	東京理科大学 尾立 晋祥氏 理工学部	Few-body Approach to Nuclear Reactions in Tandem and Cyclotron Energy Regions	国内 35 名, 国外 32 名
	東京大学理学部 永嶺 謙忠氏	International Symposium on Muon Catalyzed Fusion	国内 42 名, 国外 33 名
1987	東京大学理学部 富永 健氏	13th International Hot Atom Chemistry Symposium	国内 90 名, 国外 47 名
	東京工科大学 塩谷 繁雄氏	6th International Conference on Dynamical Processes in Excited States of Solids	国内 110 名, 国外 78 名
	東邦大学理学部 佐々木 亘氏	The University of Tokyo International Symposium on Anderson Localization	国内 52 名, 国外 52 名

年度	贈 呈 先 代 表 者	対 象	参 加 者
1987	高エネルギー物 高橋 嘉右氏 理学研究所	7th International Conference on Physics in Collision	国内 98 名, 国外 98 名
	宇宙科学研究所 田中 靖郎氏	International Symposium on The Physics of Neutron Stars and Black Holes	国内 60 名, 国外 60 名
	東京大学 加藤 貞幸氏 原子核研究所	第 16 回 INS 国際シン ポジウム「ニュートリ ノ質量とその周辺」	国内 84 名, 国外 24 名
1988	秋田大学医学部 滝沢 行雄氏	Second International Conference on Low Level Measurements of Actinides and Long-Lived Radionuclides in Biological and Environmental Samples	国内 30 名, 国外 70 名
	京都大学理学部 寺本 英氏	The 2nd Japan-China Bilateral Symposium on Biophysics	国内 50 名, 国外 30 名
	東京大学理学部 石原 正泰氏	International Symposium on Heavy Ion Physics and Astrophysical Problems	国内 115 名, 国外 30 名
	北海道大学 赤石 義紀氏 理学部	Sapporo International Symposium on Developments of Nuclear Cluster Dynamics	国内 37 名, 国外 27 名

年度	贈 呈 先 代 表 者	対 象	参 加 者
1988	京都大学基礎物 高山 一氏 理学研究所	コンプレックスな物理系における動的協力現象に関する湯川国際セミナー	国内 88 名, 国外 25 名
	宇宙科学研究所 高柳 和夫氏	Second Japan-China Symposium on Atomic and Molecular Physics	国内 26 名, 国外 12 名
1989	高エネルギー物 菅原 寛孝氏 理学研究所	KEK Topical Conference on e^+e^- Collision Physics	国内 100 名, 国外 50 名
	分子科学研究所 井口 洋夫氏	International Symposium on VUV-SX Physics and Chemistry	国内 50 名, 国外 7 名
	東京大学 守谷 亨氏 物性研究所	ISSP International Symposium on the Physics and Chemistry of Organic Superconductors	国内 70 名, 国外 30 名
	東京大学 野村 亨氏 原子核研究所	Physics and High-Intensity Hadron Accelerators	国内 100 名, 国外 30 名
1990	京都大学基礎物 西島 和彦氏 理学研究所	数学と場の量子論における共通の問題	国内 60 名, 国外 20 名
	大阪産業大学 長谷川博一氏 理化学研究所	惑星間塵の起源と進化	国内 60 名, 国外 140 名
	渡部 力氏	原子衝突の理論的研究	国内 30 名, 国外 15 名
	東京大学理学部 佐藤 勝彦氏	宇宙初期における元素合成と初期宇宙の進化	国内 50 名, 国外 50 名
	東京大学 荒船 次郎氏 宇宙線研究所	最高エネルギー宇宙線の宇宙物理学的問題	国内 50 名, 国外 20 名
	東京大学 片山 武司氏 原子核研究所	クーラーリングとその応用	国内 84 名, 国外 29 名
1991	分子科学研究所 井口 洋夫氏	非線形光学材料に関する日ソシンポジウム	国内 24 名, 国外 13 名

年度	贈 呈 先 代 表 者	対 象	参 加 者
1991	広島大学理学部 宮村 修氏	高エネルギー原子核衝突とクォークグルーオンプラズマ	国内 62 名, 国外 28 名
	新潟大学理学部 池田 清美氏	不安定核の構造と反応	国内 68 名, 国外 32 名
	京都大学基礎物理工学研究所 長岡 洋介氏	1991 Yukawa International Seminar on "Low Dimensional Field Theories and Condensed Matter Physics"	
	東北大学 金属材料研究所 鈴木 謙爾氏	第 5 回非結晶構造物質の構造に関する国際会議	国内 74 名, 国外 44 名
	東北大学サイクロトロン・ラジオアイソトープセンター 藤岡 学氏	電磁質量分離器とその応用技術に関する第12回国際会議	国内 91 名, 国内 58 名
	高エネルギー物理工学研究所 小林 誠氏	格子場の理論国際会議	国内 46 名, 国外 130 名
1992	東京大学 物性研究所 村田 好正氏	第 3 回物性研国際セミナー「固体表面における原子分子のダイナミックス」	国内 139 名, 国外 23 名
	東北大学サイクロトロン・ラジオアイソトープセンター 織原彦之丞氏	バイオPIXEシンポジウム	国内 109 名, 国外 42 名
	大阪大学理学部 都 福仁氏	磁性と超伝導に関する日独セミナー	国内 42 名, 国外 29 名
	東海大学理学部 鶴岡 靖彦氏	アジア物理教育シンポジウム	国内 48 名, 国外 44 名
	電気通信大学 松沢 通生氏	第 1 回東アジア国際セミナー「原子分子物理学」	国内 66 名, 国外 16 名

年度	贈 呈 先	代 表 者	対 象	参 加 者
1992	分子科学研究所	中村 宏樹氏	分子動力学と化学反応に関する日本イスラエル合同シンポジウム	国内 30 名, 国外 6 名
	東京大学 宇宙線研究所	荒船 次郎氏 戸塚 洋二氏	International Symposium on Neutrino Astrophysics	国内 130 名, 国外 78 名
	東京大学 原子核研究所	坂田 文彦氏	第21回核研シンポジウム「高速回転する原子核」	国内 75 名, 国外 60 名
1993	東京大学理学部	永嶺 謙忠氏	ミュオンスピン回転緩和共鳴 国際会議	国内 21 名, 国外103名
	日本大学理学部	宇野 良清氏	第11回ホウ素及びホウ化物に関する国際会議	国内 55 名, 国外 34 名
	京都大学基礎物 理学研究所	池田 研介氏	湯川国際セミナー「量子とカオス」	国内 50 名, 国外 22 名
	電気通信大学	宅間 宏氏	第21回純粋応用物理学連合総会	国内 58 名, 国外 69 名
	東京大学 物性研究所所長	竹内 伸氏	第 4 回物性研シンポジウム「強磁場における最前線」	国内153名, 国外 38 名
1994	大阪大学 蛋白研究所	京極 好正氏	第 1 回東アジア生物物理学シンポジウム	国内203名, 国外104名
	西東京科学大学	堂山 昌男氏	第 6 回低速陽電子ビーム国際ワークショップ	国内 41 名, 国外 51 名
	早稲田大学理 工学総合研究 センター	藤本 陽一氏 長谷川俊一氏	第 8 回超高エネルギー宇宙線相互作用国際会議	国内 92 名, 国外 36 名
	姫路工業大学 理学部	菅野 暁氏	第 7 回微粒子と無機クラスターに関する国際シンポジウム	国内205名, 国外103名
	九州大学薬学部	前田 稔氏	第 3 回放射性薬品化学に関する日中共同セミナー	国内 38 名, 国外 11 名

年度	贈 呈 先 代 表 者	対 象	参 加 者
1994	新潟大学理学部 池田 清美氏	不安定核の物理に関する国際シンポジウム	国内131名, 国外 11 名
	東京大学 山崎 敏光氏 原子核研究所	1 GeV/c領域の中間子ビームを用いた原子核素粒子物理	国内 89 名, 国外 32 名
1995	東京大学理学部 小林 俊一氏	東京大学ワイツマン研究所共同シンポジウム「メソスコピック系の物理」	国内 84 名, 国外 23 名
	東京大学大学院 石原 正泰氏 理学系研究科	エキゾティック原子・原子核国際会議	国内 40 名, 国外 29 名
	中部大学工学部 宮島 佐介氏	International Meeting on Future of Fractals	国内 73 名, 国外35名
	京都大学基礎物 長岡 洋介氏 理学研究所	湯川国際セミナー「標準模型から大統一理論へ」	国内 174 名, 国外 36 名
	東京大学 杉本大一郎氏 教養学部	国際天文学連合シンポジウムNo.174「星団の力学的進化—理論と観測の新展開」	国内 25 名, 国外 47 名
	京都大学 中西 襄氏 数理解析研究所	BRS対称性・20周年記念国際シンポジウム	国内 71 名, 国外 14 名
	金沢工業大学 西川 治氏 電子工学科	Tunneling Characteristics of Individual Surface Atoms	国内 128 名, 国外 14 名
	東京大学大学院 佐藤 勝彦氏 理学系研究科	「宇宙定数と宇宙の進化」国際会議	国内 119 名, 国外 22 名
	大阪大学理学部 糸山 浩氏	「場の量子論の新展開」	国内 167 名, 国外 20 名
	東京大学 兼岡 一郎氏 地震学研究所	東大国際シンポジウム「宇宙年代学と同位体地球科学」	国内 120 名, 国外 30 名

1996年度～1998年度は休止

(贈呈先の所属は贈呈時のもの)

海外派遣研究者

年 度	派 遣 者	研 究 目 的	留 学 先
1956	小林理化学研究所 森田 正人氏	原子核理論、素粒子論の研究	アメリカ
	東京大学 松浦 二郎氏 教養学部	超ウラン元素の化学的研究	フランス
1957	東京大学 小出昭一郎氏 教養学部	結晶内における遷移金属イオンの諸性質の理論的研究	イギリス
	東京大学農学部 麻生 末雄氏	ラジオアイソトープの農学分野における利用	アメリカ
1958	立教大学理学部 伊藤 隆氏	生物体におよぼす放射線の影響	アメリカ
1959	東京大学大学院 真隅 泰三氏 数物系研究科	固体電子工学の基礎物理的研究	アメリカ
	東京大学 磯矢 彰氏 原子核研究所	サイクロトロンによる核反応の研究	アメリカ
1960	東京教育大学 池田 長生氏 理学部	放射化学、分析化学に関する新しい知見、技術の研究	ドイツ
	理化学研究所 佐田登志夫氏	機械工業における RI の利用	アメリカ
	東京大学 菅 浩一氏 原子核研究所	空気シャワーの研究	アメリカ
1961	東洋紡績(株) 上田 寿氏 技術研究所	放射線の固体高分子化合物中に生じたラジカルの電子スピン共鳴吸収による研究	アメリカ
	北海道大学 渡辺 宏氏 理学部	結晶内 ions を marker として local な性質を調べる	イギリス
1962	大阪大学理学部 近藤 道也氏	加速器、ことに A. V. F.サイクロトロンの研究	アメリカ
	電電公社 新井 敏弘氏 電気通信研究所	磁界中における半導体の光学的諸性質の研究	イギリス
1963	東京大学応用微生物研究所 金井 竜二氏	同位元素を用いた光合成機作の研究	ドイツ
1964	東京都立大学 金子洋三郎氏 理学部	原子衝突の実験に関する研究	イギリス

年度	派遣者	研究目的	留学先
1965	ソニー(株)研究所 森垣 和夫氏	半導体内の電子状態の研究	フランス
1966	大阪大学理学部 溝淵 明氏	Van de Graaff 型加速装置を用いた原子核反応による核構造の研究	アメリカ
	東京大学大学院 香村 俊武氏 理学系研究科	素粒子の原子核反応, 重粒子間の相互作用の研究	イギリス
1967	京都大学理学部 牟田 泰三氏	場の理論における複合粒子の条件	イギリス
	東京大学 黒田 育子氏 原子核研究所	原子核(中重核)の多体問題的方法, およびその構造について研究	デンマーク
1968	東京大学理学部 池田 清美氏	原子核構造の種々の側面の理論的追究	ソ連、デンマーク
1969	東京大学理学部 山崎 昶氏	核磁気共鳴とその応用	ドイツ
1970	東京大学 林 憲二氏 教養学部	素粒子論ハドロンの表現	ドイツ
	東京大学 永野 元彦氏 原子核研究所	(1)水平シャワーの観測と解釈 (2)空気シャワーの芯の研究	ドイツ
1971	東京大学 石原 正泰氏 原子核研究所	インビーム γ線を用いた原子核構造, 核反応の研究	スウェーデン
	東京大学 栗田 進氏 物性研究所	イオン結晶の遠赤外レーザーによるサイクロトロン共鳴, および帯間磁気光吸収の精密な測定により励起子および電子のポーラロン効果を研究	アメリカ
1972	東京工業大学 八田 一郎氏 理学部	誘電体の相転移の動的機構	イギリス
	東京都立大学 広瀬 立成氏 理学部	反核子偏極の測定及び $\bar{p}p$ 消滅における多重発生の研究	ドイツ
1973	東京大学理学部 永宮 正治氏	原子核の励起状態の電磁氣的性質の研究, および核スピンの物質中での超微細相互作用の研究	アメリカ
	東京大学工学部 海老沢丕道氏	(1)第二種超伝導体の輸送現象 (2)量子液体の磁氣的性質の研究	アメリカ
1974	東京大学理学部 高木 伸氏	液体ヘリウム 3 の異常相の理論的研究	イギリス

年度	派 遣 者	研 究 目 的	留 学 先
1974	大阪大学教養部 大山 忠司氏	高密度励起子系における凝縮相の安定性とバンド構造の関係の研究	アメリカ
1975	東北大学 黒田 規敬氏 金属材料研究所	層状半導体における非線形磁気光学効果の研究	アメリカ
	大阪大学理学部 仲伏 廣光氏	二段二重束質量分析装置による原子質量の精密測定—原子質量の精密測定用 RF 質量分析計の再建作業、およびこれによる原子質量測定の研究	オランダ
1976	東北大学理学部 新村 信雄氏	TOF 中性子回折法による過渡現象の研究	デンマーク
	京都大学理学部 松柳 研一氏	中重核における集団励起モードの微視的理論の研究	デンマーク
1977	京都大学基礎物 山脇 幸一氏 理学研究所	光的量子化の特徴である波動関数を用いてハドロン共鳴の分類の研究	アメリカ
	大阪大学理学部 片山 信一氏	IV—VI族化合物半導体の構造相転移の研究	アメリカ
	京都大学基礎物 氷上 忍氏 理学研究所	相転移と臨界現象を理論的に研究	アメリカ
1978	筑波大学 外山 学氏 物理学系	原子核反応の機構についての研究	アメリカ
	東京大学理学部 小野 義正氏	超流動 ^3He の輸送現象の研究	アメリカ
	東京大学 倉又 秀一氏 宇宙線研究所	原子核乾板と他の測定器の複合装置を用いて行なわれるニュートリノ反応による新素粒子研究実験への参加	アメリカ
1979	大阪大学工学部 田口 常正氏	II—VI半導体の格子欠陥の生成、消滅機構の研究	イギリス
	岡山大学工学部 東辻 浩夫氏	高密度プラズマの理論	アメリカ
1980	横浜国立大学 佐々木 賢氏 教育学部	ノンレプトニック崩壊などの諸現象を量子色力学を用いて研究	アメリカ
	早稲田大学理工 玉田 雅宣氏 学研究所学生	宇宙線を用いた超高エネルギー核衝突による新しい型の核相互作用の研究	ソビエト

年度	派 遣 者	研 究 目 的	留 学 先
1980	新潟大学理学部 鈴木 宜之氏	軽い核におけるクラスター構造と高励起エネルギーでの分子的共鳴	アメリカ
1981	東京都立大学 遠藤 和豊氏 理学部	同時計数メスバウア分光法により、壊変によって生じる不安定な化学種の時間的推移をしらべる研究	ドイツ
	名古屋大学 三宅 和正氏 理学部	超流動の物理の理論的研究	イギリス
1982	東京大学大学院 手嶋 久三氏 理学系研究科	anomalous Ward identity における発散の処理の再検討及び dynamical Higgs mechanism の模型と 100 GeV 領域の現象への反映	アメリカ
	大阪大学理学部 城 健男氏	磁気体積効果等の物性の研究及び photoemission の実験で得られている動的な現象の理論的研究	イギリス
1983	北海道大学 住吉 孝氏 工学部	放射線化学初期過程の研究にピコ秒の時間分解能を有する電気伝導法を用い、従来からの種々の高速分光法とあわせて詳細な解明をおこなう	西ドイツ
1984	立教大学理学部 鈴木 昌世氏	電離放射線励起及び光励起に基づく希ガス・シンチレーション(混合系、凝縮層を含む)に関する実験的研究	スイス
	東京大学理学部 梁 成吉氏	格子量子色力学, クォーク・グルオンの力学系の非摂動的構造の解明	デンマーク
1985	京都大学理学部 清水 良文氏	高スピン状態における原子核の分光学的研究	デンマーク
1986	大阪大学教養部 川村 光氏	相転移現象の統計力学的研究	アメリカ
	理化学研究所 神原 正氏 研究員	加速器を用いた原子衝突過程の実験	西ドイツ
1987	東京大学 原 隆氏 教養学部	構成的場の理論及び厳密統計力学	アメリカ
	東京大学大型 吉永 尚孝氏 計算機センター	16 重極の自由度と相互作用するボソン模型	イギリス

年度	派遣者	研究目的	留学先
1987	琉球大学理学部 中里 弘道氏	確率過程量子化法とその応用	デンマーク
1988	東京大学 錦織 紳一氏 教養学部	金属錯体をホストとする包接化合物の化学	カナダ
	東京大学理学部 松尾 泰氏 物理学教室	ひも理論の幾何学的量子化	アメリカ
1989	京都大学基礎物 武末 真二氏 理学研究所	可逆セルオートマトンの熱力学的振舞	アメリカ
	京都大学教養部 小林健一郎氏	Conformal Field Theory と String のコンパクト化	アメリカ
	東北大学理学部 高木 滋氏	希土類及びウランの化合物での重い電子系の物性研究	スイス
1990	東京大学 福山 寛氏 物性研究所	超低温・高磁場下での個体 ³ He の核磁性	アメリカ
	慶應義塾大学 高野 宏氏 理工学部	ランダム・スピン系における緩和現象の統計力学的研究	イギリス
	高エネルギー物 石橋 延幸氏 理学研究所	二次元の場の量子論と弦理論	アメリカ
	京都大学基礎物 松尾 正之氏 理学研究所	原子核における大振幅集団運動の理論的研究	デンマーク
1991	新潟大学理学部 矢花 一浩氏	原子核理論	アメリカ
	大阪大学教養部 小堀 裕己氏	物性実験	アメリカ
	京都大学基礎物 菅野 浩明氏 理学研究所	重力理論	イギリス
1992	東京大学 松田 祐司氏 教養学部	高温超伝導実験	アメリカ
	高エネルギー物 野尻美保子氏 理学研究所	素粒子理論	アメリカ
	理化学研究所 小島 隆夫氏	低エネルギーイオン分子反応実験	アメリカ
1993	広島大学理学部 大野木哲也氏 物理学科	素粒子論	アメリカ
	広島大学理学部 森 弘之氏 物性学科	物性理論	アメリカ

年 度	派 遣 者	研 究 目 的	留 学 先
1993	順天堂大学医学 中田 仁氏 部物理研究室	原子核理論	アメリカ
	学習院大学 加藤 隆二氏 理学部化学科	放射線化学	ド イ ツ
1994	東京大学理学部 立川 真樹氏	赤外ガスレーザーにおけるレーザー不安定の発生機構	アメリカ
	東北大学 松井 広志氏 科学計測研究所	極低温におけるヘビーフェルミオンの音響的ドハース-ファンアルフェン効果	イギリス
	東京大学 綿引 芳之氏 原子核研究所	ゲージ理論および格子理論による重力の量子化	デンマー ク
1995	東京大学理学部 羽田野直道氏 物理学科	量子多体系の基底状態相転移	アメリカ
	横浜国立大学 武田 淳氏 工学部	一次元絶縁体の光誘起欠陥状態に関する分光学的研究, 有機フォトクロミック化合物の光誘起相転移現象の研究	アメリカ
	茨城大学 西森 拓氏 理学部	砂地形の非線形動力学	デンマー ク
1996	高エネルギー研 磯 暁氏 究所	場の量子論と物性物理への応用	アメリカ
	レイ・パストゥ 小田 玲子氏 ール大学	荷電棒状ミセルの構造とその相転移	フランス
1997	N.B.I. 日本学術 佐藤 晴正氏 振興会海外特別 研究員	世界線形式に基づいた Bern-Kosower 規則の研究	ド イ ツ
	N.B.I. 日本学術 西垣 真祐氏 振興会海外特別 研究員	量子力学のカイラル対称性の破れのランダム行列理論による記述	アメリカ
1998	高知大学理学部 津江 保彦氏	ハドロン物質の相転移のダイナミクス	フランス

(派遣者の所属は派遣時のもの)

途上国若手研究者招聘

年度 滞在期間	招聘された研究者	研究題目	研究場所 受け入れ担当
1992 5月8日— 8月8日	ベトナム原子力委員会 理論計算機物理部長 Vo Hong Anh	プラズマ中の非 線形波動と不安 定性の理論	国立核融合研究所 市川芳彦教授
1992 7月1日— 10月1日	ベトナム・ホーチミン市大学 理論物理教室教授 Duong Van Phi	素粒子論	東京大学理学部, 原子核研究 所, 高エネルギー研 神奈川大学理学部 宮沢弘成教授
1992 8月10日— 93年7月 3日	ポーランド・ミツキエビッチ 大学物理学科上級助講師 Adam Lipowsky	統計物理	東京大学理学部 鈴木増雄教授
1993 6月3日— 10月14日	ベトナム科学アカデミー 理論物理研究所研究員 Hoang Ngoc Long	電磁場における 重力子の光子へ の変換	高エネルギー物理学研究所 湯川哲之教授
1993 7月23日— 94年1月 24日	ベトナム・ハノイ理論物理研 究所教授 Nguyen Ai Viet	固体物理理論 Metallic carbon nanotube にお ける格子不安定 性	東京大学物性研究所 安藤恒也教授
1993 10月31日— 94年10月 11日	中国・厦門大学物理学科講師 Lin Ting Ting	素粒子論 CP violation and B-physics	高エネルギー物理学研究所 小林誠教授
1994 8月31日— 95年6月	ベトナム原子力委員会核科学 技術研究所理論計算機物理部 原子核理論主任研究員 Nguyen Dinh Dang	原子核理論	東京大学原子核研究所 赤石義紀教授
1994 1月26日— 95年9月	中国・清華大学物理学科 助教授 王青	素粒子論, 中性 Kメソン物理, CPTの破れ, ゲ ージ理論	名古屋大学理学部 三田一郎教授
1994 9月9日— 95年7月	スロバキア科学アカデミー 物理研究所研究員 Miroslav Kolesik	統計物理	東京大学理学部 鈴木増雄教授

年度 滞在期間	招聘された研究者	研究題目	研究場所 受け入れ担当
1994 94年10月 1日—95 年7月	中国・復旦大学物理研究所 研究員 胡長武	C ₆₀	東北大学金属材料研究所 粕谷厚生助教授
1995 4月18日— 96年2月 13日	ベトナム・フエ大学物理学科 講師 Nguyen Trung Dan	表面物理	東京大学工学部 花村榮一教授
1996 9月8日— 97年3月 5日	ベトナム・ホーチミン市大学 理論物理教室講師 Truong Ba Ha	結晶物理, 物性 理論	早稲田大学理工学部 大槻義彦教授
1996 12月11日—	ベトナム・ハノイ大学講師 Fam Le Kien	量子光学理論	電気通信大学レーザー極限技 術研究センター 清水和子助教授
1997 8月27日— 98年2月 26日	中国科学院研究生院物理部 副教授 蘇 剛	統計物理	東京理科大学理学部 鈴木増雄教授
1997年6月 16日—12 月15日	ベトナム原子力研究所 理論物理部 Nguyen Hong Son	物性理論	東京大学物性研究所 安藤 恒也教授
1998年4月 1日—9 月30日	ベトナム国立自然科学・工学 センター Le Hong Khiem	不安定原子核の 反応	理化学研究所 リニアック研 谷畑勇夫主任研究員
1998年6月 17日—12 月17日	ベトナム国立自然科学・工学 センター Ho Trung Dung	超放射レーザー に関する研究	電気通信大学 氏原紀久男教授

財団法人 仁科記念財団

113-8941 東京都文京区本駒込2丁目28番45号

電話 東京 03 (3942) 1 7 1 8

郵便振替番号 00130-5-135934

(1999年4月) 1,200